様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４４５

研究課題名（和文）「『夷堅志』の総合的研究」

研究課題名（英文）General Studies of "Yi jian zhi"

研究代表者
安田　真穂（YASUDA, MAHO）

関西外国語大学・英語国際学部・准教授

研究者番号：７０３５１５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究成果としてはまず、毎月二回の研究会を開催し、初年度に『『夷堅志』訳注甲志下』(汲古書院)、最終年度には同『乙志上』の二冊を上梓した。本書は甲志後半と乙志前半を各十巻ずつ、①国内外から集めた十五種もの版本と校勘補訂を行ってテキストを再構築し、②各話を歴史書や地理志などと照合して詳細な注を付け、全訳も掲載した。③巻末には、人名・地名・分類索引を付し、多岐に渉る研究者の利便性に配慮した。本書は本邦初の全訳注本であり、文学や歴史、民俗学など幅広い分野に貢献できる価値の高いものであると自負する。更に、この研究を基に、各自の専門分野に関する研究も進め、論文や学会発表を行ったことも大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：We held bi-monthly meetings for three years. First and foremost, as a result of those meetings, we published two books: “Translation and commentary of ‘Yi jian zhi’夷堅志 Volume One-Part Two” and ”Volume Two-Part One”. Each volume is divided into two parts of ten books. (1) We compared the Chinese characters used in fifteen versions of texts to reconstruct the best text. (2) After carefully comparing the contents of those stories with actual geography and history books, we made annotations. (3) We have also provided an index of names and places, and categorized the stories. We strongly believe that it is the first publication in Japan to include annotations and a complete translation of ‘Yi jian zhi’. Furthermore, it has enabled us to further advance the study of our own research fields by making contributions to various publications of research papers and given speeches at academic meetings. This is a great achievement that will benefit the development of our academic society.

研究分野：中国古典小説

キーワード：夷堅志　洪邁　太平広記　宋代　中国古典小説　版本　地理志　自序

１．研究開始当初の背景

今回、平成 27 年から平成 29 年までの三年間、科研費を使って研究を続けさせて頂いたが、実は本研究メンバーによる『夷堅志』研究は、その三年半前、平成 23 年 6 月からすでに始まっていた。当時は研究会を開いて『夷堅志』所載の話を読み進めるのみであったが、次第に文学のみならず歴史学的、民俗学的価値を感じ、研究成果を出版という形で発表することにした。それが『『夷堅志』訳注　甲志上』（汲古書院、2014）である。

その翌年には、ちょうど勉誠出版から『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』（伊原弘、静永健編、2015）が出版され、中国文学界においても『夷堅志』に対する価値が再評価され、各分野からも注目を集め始めていた。そして本書には、研究代表者の安田真穂が「宋代の冥界観と『夷堅志』―冥界の川を中心に」と題した論文を、そして研究分担者の福田知可志も「「薛季宣物怪録」―『夷堅志』「九聖奇鬼」を読む」と題した論文を寄稿発表した。

更に近年、海外の中国古小説研究者等からも、『夷堅志』が宋代の社会生活の実情を活写し、宋代以降の小説類にも多くの題材を提供している点について積極的に評価すべきであると指摘されるほか、歴史学の分野においても、宋代の社会制度や士大夫のネットワークの実態を保存した信頼できる史料であるとして、その価値が見直されつつあった。そして『夷堅志』所載の話の多くが江南を中心とした南方を舞台にしており、地域性を反映した内容が多く含まれていることからも、民俗学や宗教学などからも注目を集め、急速に『夷堅志』に対する学術的価値が高まっていた。

こうした背景から、『夷堅志』について更に詳細に調査、検討していく必要性を感じ、今回の研究に到ったのである。

２．研究の目的

(1)　テキスト校勘

本研究の対象である『夷堅志』は、その原本は全四百二十巻とされるが、元代に一旦散逸し、その後徐々に収集されたものの現在は二百七巻が現存するのみである。そして現在は、何卓校注の中華書局本『夷堅志』が最も完備された通行本として利用されているが、実際に諸本と比較すると、十分には校勘されていないことが分かった。そこで、現存する諸テキストを可能な限り収集した上で、校勘、整理、補訂を行って、新たに最善のテキストを再構成することを最初の目的とした。

(2)　訳注

次に、これらの新たに再構成したテキストを元に、その内容を歴史書や地理志などと比べることで、各話について精緻に訳注を付していくことにより、歴史学や民俗学的価値を明らかにしていく。そしてこの研究成果を『『夷堅志』訳注』として出版することで、更に幅広い分野の研究者の需要に貢献し、成果を社会に還元していく。

(3)　論文発表

そして、これらの詳細な調査研究を通じて、今回の研究メンバーそれぞれの専門分野において各自の研究を進め、学会や論文に発表していく。

３．研究の方法

(1)　研究会

毎月二回程度、『夷堅志』研究会を開催して、研究分担者と共に、『夷堅志』を分担して精読していった。それはこの三年間に、合計７２回にも及んだ。

①　平成 27 年度（計２６回）

4/3(金),4/12(日),5/2(土),5/9(土),5/16(土),6/6(土),6/20(土),6/27(土),7/11(土),8/5(水),8/26(水),9/4(土),10/3(土),10/24(土),11/14(土),11/28(土),12/12(土),12/26(土),1/23(土),2/4(木),2/26(金),3/2(水),3/11(金),3/18(金),3/23(水),3/29(火)

②　平成 28 年度（計２３回）

4/9(土),4/23(土),5/7(土),5/21(土),6/4(土),6/25(土),7/16(土),7/30(土),8/20(土),8/27(土),9/10(土),9/17(土),10/15(土),10/22(土),11/12(土),11/26(土),12/10(土),12/17(土),1/21(土),1/28(土),2/16(木),3/1(水),3/15(水)

③　平成 29 年度（計２３回）

4/22(土),5/13(土),5/27(土),6/3(土),6/17(土),7/15(土),8/3(木),8/19(土),9/2(土),9/16(土),9/30(土),10/14(土),10/21(土),11/4(土),11/18(土),12/2(土),12/16(土),1/20(土),2/3(土),2/10(土),2/17(土),3/3(土),3/24(土)

(2)　原稿作成

『夷堅志』は各志二十巻からなり、これを上下二冊（各十巻）に分けて、一人に二巻ずつ割り当てた。その担当巻は、『甲志下』では、巻十一から十三及び巻十七前半を福田知可志、巻十四と巻十八を山口博子、巻十五と巻十九を田渕欣也、巻十六及び巻十七後半を安田真穂、巻二十を我々のアドバイザーでもある齋藤茂元大阪市立大学教授がそれぞれ担当した。『乙志上』では、巻一、二を福田知可志、巻三、四を山口博子、巻五、六を田渕欣也、巻七、八を安田真穂、巻九、十を齋藤茂元教授が担当した。

基本的には担当者が下原稿を作成し、それを研究会一週間前までにメンバー全員に原稿を送る。各メンバーは研究会当日までに各自、調査を開始する。そして研究会では、メンバーが下原稿について精査検討し、その調

査結果をふまえて原稿を作成し直す、という手順を取っている。
　更に、下原稿を作成する際に調査する内容については以下に列挙した。

① 文字の校勘
　『夷堅志』のテキスト諸本を出来うる限り全て比較検討し、文字の校勘補正を行った。今回収集し、校勘に使用した諸本は以下の通り。
・『新編分類夷堅志』(京都大学附属図書館近衛文庫所蔵)
・『夷堅志陰徳』(『説郛』百巻本)
・『新訂増補夷堅志』(名古屋蓬左文庫所蔵)
・『新刻夷堅志』国立公文書館内閣文庫所蔵
・『夷堅支志』『文淵閣四庫全書』一〇四七冊所載
・『夷堅志』国立国会図書館所蔵
・『夷堅甲志二十巻・乙志二十巻・丙志殘十九巻・丁志二十巻』『宛委別蔵』所載
・『夷堅甲志二十巻・乙志二十巻・丙志二十巻・丁志二十巻・支甲十巻・支乙十巻・支丙十巻・支丁十巻・支戊十巻・支庚十巻・支癸十巻・三志己十巻・三志辛十巻・三志壬十巻』『續修四庫全書』一二六四～一二六六冊収載
・『夷堅甲志・乙志・丙志・丁志』『百部叢書集成』七六『十萬卷樓叢書』収載
・『夷堅志補遺』『筆記小説大觀』四十編収載
・『夷堅志』『舊小説』丁集収載。国立国会図書館関西館所蔵
・『新校輯補夷堅志一百八十巻・志補二十五巻・再補一巻・拊校勘記一巻』中文出版社景印本
※張元濟の校記に示される明鈔本（旧商務印書館涵芬樓所蔵）と清、嚴元照校本『夷堅志』（旧袁伯夔所蔵）については、確認できないのでそのまま引用した。
・『夷堅志』(『歴代小説筆記選』上海商務印書館、国立国会図書館所蔵)
・『夷堅志』(『筆記小説大觀』)
・『夷堅志』(中華書局)
（なお詳細については、『『夷堅志』訳注』の凡例に記載）

② 内容に関する注
　『夷堅志』各話の内容について、『建炎以来繫年要録』『宋会要輯稿』『宋史』などの歴史書の他、『輿地紀勝』『淳熙三山志』『咸淳臨安志』『雍正浙江通志』『乾隆江南通志』などの地理志、またその他様々な書籍と照合した。また今回、中国地方誌全文検索ができる電子版『江西省地方誌』（第１輯、第２輯）、『福建省地方誌』（第１輯、第２輯）を購入したことにより、日本で見られなかった地方誌の検索もできるようになり、注の精度が飛躍的に増した。

③ 全訳
　再構築したテキストを元に、宋代という時代背景や、注記によって得られた情報を反映させた全訳を作成した。

④ 分類項目
　話の内容について、話の要素を抽出することを目標に、分類項目を列挙した。その際、『太平広記』の分類を参考にしたが、今回新たに設けた分類項目もある。

⑤ 索引
　またこれらの研究成果として『『夷堅志』訳注』を出版する際に、登場人物、地名、分類項目の索引を巻末に作成した。これにより、広範囲の研究者の研究に役立てられるのではないかと考えている。

４．研究成果
(1) 書籍『『夷堅志』訳注』の出版
　当初の計画通り、期間中に『『夷堅志』訳注　甲志下』(2015 年 9 月 25 日発行、汲古書院）を上梓した。また更に、三年目には『『夷堅志』訳注　乙志上』(2017 年 7 月 7 日、汲古書院)も出版することができた。予定以上に成果を残せたといえる。

(2) 論文発表、口頭発表など
　『夷堅志』の精読と内容を精緻に分析照合していくことを通じて得られた情報を元に、これらの研究の成果を論文や口頭発表などの形で発表し、社会に資するようにした。

〔論文発表〕
① 安田　真穂（研究代表者）
・「中国古小説における「冥簿」について」、（『富永一登先生退休記念論集　中国古典テクストとの対話』2015 年 10 月 8 日、研文出版）
　中国では古来、天命や寿命は生まれた時から定められているという思考様式があり、とりわけ人が生き返る「再生譚」においては無くてはならない要素となっている。特に死者が冥界に着くと寿命通りに死んだかどうかを、寿命が書かれてある帳面（冥簿）で確認する話が多くあることに注目し、「冥簿」に記載された内容が、時代や宗教などによっても変遷があることを指摘した。例えば、いつ科挙に合格するのかや将来の官職が記載された話などは、当時の士大夫の関心事が反映されている。また仏教的要素を含んだ再生譚では、「功徳簿」や「諸罪簿」があって生前の功徳が記されているとされ、仏教の布教の一端を担ったと想像できる。また後代、冥簿を書き換えて、自らの運命を変える話も散見する。『夷堅志』では、生涯に口にするものが全て記載された「食料簿」や、給料や褒美の量が書かれたものなど、一風変わった冥簿が登場し、宋人の関心事が反映された再生譚の新しい展開であろうと指摘した。

・「『夷堅志』の新しさ―冥界説話をめぐって」（『夷堅志』訳注甲志下、2015 年 9 月 25 日、汲古書院）

中国古来の原始的な霊魂観に基づく冥界は、魂が空へ上っていく天上世界であったり、土葬の習慣から地下に設定されたり、また山岳信仰から泰山に冥界があると考えられたりしていた。それが、仏教が流入したことで地獄を中心とした仏教的な冥界観に変化していく。そして更に宋代の『夷堅志』に見られる冥界になると、南方の説話を多く含む為か、船に乗って冥界へ行く話が散見することが新しい特徴である。またすべての魂が泰山のような一つの場所へ集まるのでは無く、地方ごとに複数の場所に散在するような話や、まるでパラレルワールドのように冥界と現世とがリンクしている話が見られることも、『夷堅志』に見られる新しい冥界観であろうと指摘した。

・「宋代の冥界観と『夷堅志』―冥界の川を中心に」（南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界アジア遊学 181、2015 年 4 月 10 日、勉誠出版）

仏教流入以前の中国の冥界は、現世と類似した世界で、泰山府君という冥界の主によって統治された官僚社会であると考えられていた。しかし仏教の影響を受けて冥界に地獄が登場すると、冥界は現世と一線を画した世界へと一変する。そして説話の中の地獄も、絵画の影響を受けつつ詳細に描写されていく。幽明を隔てる境として横たわるとされる三途の川(奈河)も、様々に描写されるが、本稿はこの冥界の川に焦点を置き、仏教から換骨奪胎した新しい宋代の冥界観について論じた。

② 福田　知可志（研究分担者）

・「『玉歴鈔伝』嘉慶十七年凌周文序刊本訳注」(五)(六)(七)（『飈風』53、55、56 号。2015、2016、2017）

『玉歴鈔伝』は、清朝の民間において最も流行したとされる善書である。閻魔王など十王が管轄する諸地獄の様相を、功罪判定の取り決め事項を含め、図像を交えて描写した、庶民のための地獄経典であり、また善行によって救われた実例としての霊験譚を付す。唐代以降盛んになった十王信仰を探る上で重要な史料であり、中国の民間における道徳観や行動原理を知る意味でも意義深い文献といえる。『玉歴鈔伝』のテキストの中では、これまで先学に言及されていなかった、嘉慶十七年（1812）凌周文序刊本を底本にして、2010 年以降訳注作業を続けている。『夷堅志』には、地獄や十王のほか、宋代の善書の一つである『樂善録』にも引用される、善行に関する説話を数多く収載する。洪邁自身も、入冥譚の一つである『夷堅甲志』巻 12「高俊入冥」に、当時の地獄に対する総括として「いわゆる地獄は、各地方にあって、時折その有様を人に託して伝えることで、世間の戒めとしているのではないだろうか」（『夷堅志』訳注　甲志下、54 頁）との興味深いコメントを残している。『玉歴鈔伝』訳注の成果は、これらの記述を解釈・考察する上で大いに参考になった。

・「『夷堅志』自序に見える編集者洪邁の態度」（『夷堅志』訳注乙志上、2017 年 7 月 7 日、汲古書院）

『夷堅志』の各志には、本来三十一の自序が付され、現存するのはそのうち十三篇のみで、南宋の趙與眥の『賓退録』に節録ながら失われた自序の一部を伺うことができる。論者は、趙與眥が「各々新意を出だす」と評価する『夷堅志』自序の特徴の中から、特に自負・反省の二点に焦点を当て、六朝志怪から宋代の筆記に至るまでの、怪異を記録する古小説に付された自序と比較しながら、洪邁を含む古小説編集者たちが怪異・鬼神・見聞を記録する行為にどう向き合っていたのかを考察した。最後に、洪邁が自著『夷堅志』に誇りを持っており、『夷堅支乙』自序で、漢の揚雄が、史官の師表たる司馬遷に与えた「奇を愛する」を自ら準えていること、また『夷堅支壬』自序で、怪異の収集・編集を止めた際に体調の異常が起きたことを諧謔的に述べていることを引用し、怪異への愛着を忌憚なく告白する洪邁の新しさを指摘した。

・「薛季宣物怪録―『夷堅志』「九聖奇鬼」を読む」（南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界アジア遊学 181、2015 年 4 月 10 日、勉誠出版）

『夷堅丙志』巻一冒頭に収録された「九聖奇鬼」は、南宋の思想家薛季宣が、九聖と称する淫祠の神から、故郷永嘉県（浙江省温州市永嘉県）の実家で干渉を受け、後に退治するまでの三週間の出来事を綴った体験記である。原題は「志過」で、すでに散逸したが、洪邁により節録の形で保存され、現存する『夷堅志』収録の説話の中でも際だって長い一篇である。論者は「九聖奇鬼」の記事を、時系列順に紹介しながらその構成を分析、薛季宣の祖先に変身して祭祀を受けようとする九聖の神を考察し、江南・嶺南の各地で伝承を持つ木石の物の怪である魈の特徴を備えていることを指摘した。『夷堅志』に収録された説話には、『夷堅甲志』巻 14「漳民娶山鬼」（『夷堅志』訳注　甲志下、102、103 頁）など、五郎、山鬼と様々な異称を持つ魈が数多く登場しており、「九聖奇鬼」に見える魈の形象と比較・参照する上で役に立った。

③ 田渕　欣也（研究分担者）

・「楊家将物語における龍退治について」(『中国学志』離号（30 号）、2015 年 12 月 21 日）

楊家将物語における龍退治の話について、まず小説『楊家府世代忠勇通俗演義志傳』における描写を通じて、龍退治に用いられる特

殊な武器や、楊家への協力者といった要素について整理を行った。しかし宮中で演じられた雑劇では、これらの諸要素は排除されてしまっており、このことに関して、龍は古くから皇帝の象徴とされてきたことから、皇帝への不敬とも捉えられかねない龍退治の話が敬遠されたのではないかと指摘した。

・「楊家将・楊令公の物語―その最期を中心に―」(『人文研究』第 68 号、2017 年 3 月 28 日)
　第 187 回宋代史談話会において「楊業の物語―その最期を中心に―」と題して発表した内容やその後に受けた指摘を活かし、また自らも調査・考察を進め、論文にまとめたもの。楊家将物語における楊業の最期について、より資料を充実させ、史実・小説・雑劇の面から考察を行った。

〔口頭発表〕
①　福田知可志「宋代の放生説話に関する一考察―『夷堅甲志』「松江鯉」をめぐって」(大阪市立大学中国学会、2016 年 12 月)
　『夷堅甲志』巻 11「松江鯉」は、平江府(江蘇省蘇州市)の住民王子簡が、四月八日に松江(呉松江)で放生を行うが、手に入った大きな魚を膾にしょうとしたところ、尾を切り落とし鱗を取ったところで鯉に逃げられる。一年後の同日に再び松江に出かけて魚を買うと、それは逃げられた鯉で、そのまま食べてしまう、という内容の短編である。王子簡は、灌仏会が行われる四月八日に放生を行いながら、躊躇無く殺生を行おうとし、逃げられた鯉を再び捕らえると、憐憫の情を起こすことなく食べており、仏や放生に対する尊崇の念や慈悲心が感じられず、ただ己の食欲を満たすのみに行動しながら、仏教説話には付きものの懲罰も描かれない。論者は、まず放生の意味を確認した上で、仏典における放生や、宋代における四月八日及び放生に関する記事、『太平廣記』や他書に見える従来の放生説話を列挙、比較・検討しつつ、「松江鯉」が王子簡の行動とプロットの展開において、これまでの説話や記事には見られない型のものであることを指摘した。

②　福田知可志「『夷堅志』に見える放生とその説話の展開」(宋代史談話会、2017 年 6 月)
　先行する「宋代の放生説話に関する一考察―『夷堅甲志』「松江鯉」をめぐって」の議論を補足する発表。『夷堅志』には放生、殺生を描く説話が多く収録されている。放生は殺生に比べて数は少ないものの、従来の指摘にあるように、仏教説話や報恩譚の特徴を備えたもののほかに、『夷堅甲志』巻 11「松江鯉」の例など、独特の展開を持つ説話を確認することができる。論者は、放生説話に関する従来の研究成果を確認した上で、それら『夷堅志』の放生説話の構成を分析、「宋代の放生説話に関する一考察―『夷堅甲志』「松江鯉」をめぐって」では言及しなかった、特徴に応じての分類を行い、比較・検討を試み、再度「松江鯉」の新しさを指摘した。

③　田渕欣也「楊業の物語―その最期を中心に―」、第 187 回宋代史談話会、大阪市立大学文学部棟 1F 122 会議室、2016 年 6 月 18 日
　楊業の最期を中心とする史実が楊家将物語においてどのように描かれているかについて考察を行うもの。まず楊家将物語の成立について整理を行い、続いて小説と史書の記述を比較検討することにより、小説が史書の記述を取り入れている部分と、史実にアレンジを加えている部分とを確認した。また雑劇における楊令公の最期について、小説と比べて簡潔な脚本の描写から、舞台上で演じられる際には様々な動作や演出が行われていた可能性があることを指摘した。

(3) その他(学会司会など)
①　安田　真穂
・2017 年 10 月 28 日、中国中世文学会(広島大学)において、高西成介氏(高知県立大学)の発表「志怪小説と『世説新語』劉考標注をめぐって」の司会を務めた。劉考標が歴史家としての立場にありながら、その注には多く志怪小説から文を引用している例を挙げた上で、歴史と小説との差異について、引用注から読み取れる劉考標の歴史観について指摘した。これは『夷堅志』における、史家である洪邁が『夷堅志』に掲載する小説を取捨選択した基準が何であったかという点と共通した課題といえる。

・2016 年 12 月 3 日、大阪市立大学中国学会(大阪市立大学文化交流センター)において、研究分担者の一人でもある福田知可志氏の発表「宋代の放生説話に関する一考察―『夷堅甲志』「松江鯉」をめぐって」の司会を務めた。放生という宗教儀礼自体が、宋代には形骸化してしまい、民間行事の一つとして本来の意味が失われていたことと、『夷堅志』にこの話を掲載するに当たって、従来の仏教説話とは違った展開の奇抜さに話の重点が置かれていることについて指摘した。

・2016 年 10 月 29 日、中国中世文学会(広島大学)において、孟夏氏(広島大学大学院後期博士課程)の発表「『新編酔翁談録』の描写の特徴について」の司会を務めた。『新編酔翁談録』は南宋末から元初に、演芸の一つである小説の種本として編集されたと考えられたもので、『夷堅志』と同時代に編纂されたと考えられる。発表では『太平広記』などからも類話を拾い上げて内容を詳細に比較した上で、語り物の種本としての特徴をより具体的に指摘した。

②　田渕　欣也

・2017 年 8 月 10 日、第 43 回宋代史研究会夏合宿(かんぽの宿奈良)に参加し、松浦智子氏（神奈川大学）の発表「明代内府で受容された宋の武人の絵物語」においてコメンテーターを務めた。明代内府で製作されたと思われる彩絵抄本『出像楊文広征蛮伝』と『大宋中興通俗演義』を検証した発表内容に関連し、南宋の頃から『太平広記』や『夷堅志』といった読み物が士大夫に広く受容されるようになると共に、それらの刊行に転運司が関わっていたことなどを指摘した。

(4) 今後の展望、『夷堅志』の新しさ

以上のような研究成果を通して、未発表のものではあるが、いくつか『夷堅志』に関して新しく気付いた点がある。これらについて、現在調査中であり、すでに研究分担者である田渕欣也は「『夷堅志』と『建炎以来繫年要録』」という標題にて、論文を発表予定にしている。

更に、平成 30 年度から三年間、再び新たに科研費の内定を頂いた。研究課題名は「語りの変遷―『夷堅志』の新しさ」（課題番号：JP18K00362、研究代表者：安田真穂）で、この三年間で得た知識をふまえ、『夷堅志』に関する研究をより一層進め、その価値を更に明らかにしていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

① 福田　知可志、『玉歴鈔伝』嘉慶十七年凌周文序刊本訳注（七）、飆風、査読有、第 56 号、2017、pp.71-86
② 田渕　欣也、楊家将・楊令公の物語―その最期を中心に―、人文研究、査読有、第 68 巻、2017、pp.65-80
③ 福田　知可志、『夷堅志』自序に見える編集者洪邁の態度、『夷堅志』訳注　乙志上、査読無、2017、pp.291-302
④ 福田　知可志、『玉歴鈔伝』嘉慶十七年凌周文序刊本訳注（六）、飆風、査読有、第 55 号、2016、pp.80-86
⑤ 田渕欣也、楊家将物語における龍退治について、中国学志、査読有、離号（30 号）、2015、pp.1-23
⑥ 安田　真穂、『夷堅志』の新しさ―冥界説話をめぐって―、『夷堅志』訳注　甲志下、巻末解説、査読無、2015、pp.317-330
⑦ 福田　知可志、『玉歴鈔伝』嘉慶十七年凌周文序刊本訳注（五）、飆風、査読有、第 53 号、2015、pp.61-68

〔学会発表〕（計３件）

① 福田　知可志、『夷堅志』に見える放生とその説話の展開、第 197 回宋代史談話会、2017 年 6 月 24 日、大阪市立大学（大阪府）
② 福田　知可志、宋代の放生説話に関する一考察―『夷堅甲志』「松江鯉」をめぐって、第 78 回大阪市立大学中国学会、2016 年 12 月 3 日、大阪市立大学文化交流センター（大阪府）
③ 田渕　欣也、楊業の物語―その最期を中心に、第 187 回宋代史談話会、2016 年 6 月 18 日、大阪市立大学（大阪府）

〔図書〕（計４件）

① 安田　真穂、福田　知可志、田渕　欣也、山口　博子、齋藤　茂、汲古書院、『夷堅志』訳注　乙志上、2017 年、330 頁
② 安田　真穂　他、研文出版、富永一登先生退休記念論集　中国古典テクストとの対話、2015 年、520 頁（pp.226-249）
③ 安田　真穂、福田　知可志、田渕　欣也、山口　博子、齋藤　茂、汲古書院、『夷堅志』訳注　甲志下、2015 年、362 頁
④ 安田　真穂、福田　知可志　他、勉誠出版、『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』、アジア遊学 181、2015 年、240 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

安田　真穂（YASUDA, Maho）
関西外国語大学・英語国際学部・准教授
研究者番号：７０３５１５５９

(2)研究分担者

福田　知可志（FUKUDA, Chikashi）
大阪市立大学・文学研究科・非常勤講師
研究者番号：００７４７２１４

田渕　欣也（TABUCHI, Kinya）
大阪市立大学・文学研究科・非常勤講師
研究者番号：９０７４７２１３

三田　博子（MITA, Hiroko）（山口　博子 YAMAGUCHI Hiroko）
大阪市立大学・文学研究科・非常勤講師
研究者番号：８０５７０４６５
（H29 に削除）

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者

三田　博子（MITA, Hiroko）（山口　博子 YAMAGUCHI Hiroko）
大阪市立大学・文学研究科・非常勤講師
研究者番号：８０５７０４６５
（H29 から研究協力者として参画）